

# いじめ研究における加害者像を再考する

—加害者が持つ向社会性に注目して—

教育心理学コース 唐 音 啓

A Review of Educational Psychology Research on Bullies

—Focusing on their prosocial behavior—

Yinqi TANG

The present paper aimed to reconsider the image of bullies in the class by overviewing the studies about bullies. A great deal of studies has been done, however, the image of bullies is various and sometimes they are inconsistent. We first consider the image of bullies drawn in the research of aggressive behavior, which regards bullying behavior as individual characteristics. Then, we will discuss bullies which have been caught in the studies of group structure viewpoints such as classroom status and peer groups. Directions of future inquiry are also discussed.

## 目 次

1. はじめに
2. 個人的側面から捉えたいじめ加害者像
  - A. いじめ研究と統合されつつある攻撃研究
  - B. 攻撃行動と心理社会的適応との関連
3. 集団的側面から捉えたいじめ加害者像
  - A. 学級内におけるいじめ加害者の立場に関する考察
  - B. Perceived Popularity 研究からの示唆
4. いじめ加害者像を再考する
5. 結語

### 1. はじめに

児童期から青年期にかけて、子どものアタッチメント対象が徐々に親から友人へと移行していくように (Hazan & Shaver, 1994), 子どもたちは、自己の社会的な世界が広がるにつれて、友人と親密な関係を築き始める (Sullivan, 1953)。「子どもの生活実態基本調査」では、小学生から高校生までのすべての学校段階で、全体の7割を超える子供たちが「友だちといつも一緒にいたい」と回答している (ベネッセ, 2009)。友人は、ともに勉学に励んだり、学校行事を楽しんだり、悩みや心配ごとを相談したり、同じ目標に向かってお互い励ましあったりできる存在であり、そうした関係性を通して、個々の社会性が培われていくと考えられる。

学校生活の大半が、友人と経験する出来事によって形づくられるようになる中で、良好な友人関係を保つことは、学校適応において重要な働きを担うといえるだろう。

こうした背景を鑑みるとき、居心地の良い友人関係を築く機会を奪われること、例えば、周囲から仲間はずれにされたり、無視されたり、身体的に傷つけられたりといった、「いじめ」の被害を経験することが、児童生徒の学校適応、およびその後の心身の発達に著しい負の影響を及ぼすことは想像に難くない。実際に、いじめの被害を受けた経験が苦痛となり、のちの適応上の困難と深刻に関連しているといった知見は多く報告されており (Coie & Kupersmidt, 1983; 岡安・高山, 2000)、ときに不登校や自殺に至る場合もある (森田, 2010)。また、松尾 (2002) は、いじめは、当事者である加害者と被害者だけの問題ではなく、いじめが発生している集団内の子どもたちにも、悪影響を及ぼすと指摘している。

このような、いじめがもたらす長期的で深刻な影響を受けて、日本では、1980年代より、いじめが社会問題のひとつとして取り上げられ、その実態把握や解決に向けた研究が盛んに行われてきた (滝, 1992; 仁平, 2017)。平成25年度には、「いじめ防止対策推進法」が施行され (文部科学省, 2013)、いじめ問題に対する学校社会の取り組みの姿勢が、さらに高まったといえるだろう。こうした尽力にもかかわらず、平成28年

度の国内のいじめ認知件数は、32万3808件と、過去最多を記録することとなった（文部科学省，2017）。学校側が認知したいじめに限っても、年間で約32万件発生しているという実情である。さらに厄介なことに、こうした認知件数は、実際に発生しているいじめの一部分を反映しているに過ぎない。例えば、本間（2003）は、認知件数の背後に、学校側が気づかないいじめがかなり潜在している可能性を指摘している。また、久保（2013）は、いじめの定義が変更された直後の年に、認知件数が如実に増加する傾向を繰り返すことから、いじめ認知件数は、学校側が把握した件数という解釈をするほうが望ましいと述べている。このように、いじめの実態や全貌の把握は依然として困難であり、いじめ問題の予防や解決に向けた研究のさらなる進展が待たれている。

いじめの実証的研究は、加害経験・被害経験といった、いじめを直接的に経験した個人の側面から捉えたもの（e.g., Vaillancourt & Hymel, McDougall, 2003; 村山・伊藤・浜田・中島・野田・片桐・高柳・田中・辻井, 015）、傍観者や観衆を含めた、いじめが発生する集団全体の構造に注目したもの（e.g., 森田・清水, 1986; Salmivalli, 2010）、そしていじめの介入プログラムの作成やその効果を測定するもの（e.g., Leff, Gullan, Paskewich, Abdul-Kabir, Jawad, Grossman & Power, 2009; 永井・山崎, 2015）に大別できる。このうち、被害者への心理的ケアや、加害者への介入は、いじめが発生したあとの解決法を図る、いわゆる、対症療法的な研究と位置づけられるだろう。また、傍観者・観衆の役割や、学級の構造など、いじめが発生している集団に注目しているものは、いじめ現象の理解を目的とした研究という位置付けができると考えられる。

こうした、いじめの研究が多角的になされつつも、いじめ問題が依然、解決されずにいる所以のひとつとして、いじめ防止に効果的な知見を提供する研究の乏しさが挙げられるだろう（大西, 2015）。従来、いじめ研究では、「被害者中心のいじめ像」（川北, 2008）に焦点が当てられ、被害者側の心理的側面や、被害者を中心に据えたいじめ現象の理解がなされてきた。その一方で、いじめの防止策に結び付くような、いじめの発生機序を明らかにする、原因療法的な研究は手薄であったといえよう。そのため、いじめを発生させる側である、加害者に関する研究も、重要視されていくべきである。（下田, 2018）。

現存するいじめ加害者研究では、のちに記すように、主に彼らがとる攻撃行動やその動機について扱っ

ているものが多い（Crick & Grotpeter, 1995; 本間, 003）。また、いじめが「教室全体が劇場」（森田ら, 1986）という性質を持ち、集団の中で生じている点を踏まえて、いじめ加害者を生む学級構造に注目した研究も散見される（橋本, 1999; 鈴木, 2015）。いじめの発生機序を追うような、原因療法的な研究を進めるにあたっては、こうした知見を組み合わせるべきだろう。すなわち、個々の攻撃行動の側面から描き出されてきたいじめ加害者像と、学級構造という視点から浮かび上がってきたいじめ加害者像の両方から、いじめ加害者に迫っていく必要があるのではないだろうか。

加えて、いじめ防止への効果的な知見を提示するためには、いじめ加害者だけでなく、加害者側を取り巻いている、仲間集団の関係性への注視が鍵となる。例えば、映画「*Mean girls*」（2004）では、仲間集団の中でリーダー格にある女子生徒が、周囲に良くない噂を流したり、懲らしめたりする首謀者でもあり、仲間集団内にいる他の生徒を怯えさせる姿が描写されている。学校生活においても、実は、こうした日常が当たり前のように存在しているのかもしれない。いじめ加害者を支える仲間集団への注視こそが、極めて重要であるという点については、学術的にも、元来、示唆されてきたものの（本間, 2003）、十分な議論は行われてこなかった。その背景には、いじめ加害者が、複数である故の不透明性があるだろう。いじめが、見えにくい、と指摘されている所以も、加害者側による集団の形成にあると考えられる。すなわち、いじめは、加害者ひとりひとりが築き上げてきた関係性の上に成り立つものであり、そうした、彼らの仲間集団内で生じている関係性を理解しようとしないう限り、根底に潜む、いじめの発生機序には迫れない。

本稿の目的は、いじめ加害者について検討した研究を概観、整理し、その姿を再考することにある。はじめに、いじめ加害行動を個人特性として捉えた攻撃研究の流れの中で描かれてきた、いじめ加害者像について考察する。加えて、学級や仲間集団といった、集団構造の視点から捉えられてきたいじめ加害者像について整理し、その後の議論へ繋げることとする。

## 2. 個人的側面から捉えたいじめ加害者像

攻撃研究の概観に移る前に、まず、いじめの定義に立ち返ってみたい。文部科学省が提示するいじめの定義では、平成25年度より使用されているものでは文言

が変更されているものの、それ以前ではすべて、『『心理的・物理的な攻撃』を受けたものが苦痛を受けること』という内容が含まれている。いじめ研究と攻撃研究の統合が指摘されているように(戸田, 2010), いじめは、加害者が被害者に対して行う、一方的な攻撃行動であると捉えられよう。本章では、はじめに、攻撃研究で得られている知見について整理する。その上で、近年報告されている、攻撃行動と心理社会的適応との関連について確認し、その後の議論へと繋げたい。

### A. いじめ研究と統合されつつある攻撃研究

いじめには、さまざまな態様がみられるだろう。そして、前述のように、いじめは、特定他者に向けられた攻撃行動であると捉えられる。「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」では、いじめの態様について、小学生から高校生のすべての学校段階で、「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」、「仲間はずれ、集団による無視をされる」の項目が全体の7割以上、次いで、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」、「ひどくぶつかられたり、たたかれたり、蹴られたりする」の項目が、全体の約3割を占めている(文部科学省, 2017)。このように、いじめでみられる攻撃行動のほとんどが、関係性攻撃または身体的攻撃の形態をとることが読み取れる。

身体的攻撃は、叩いたり蹴ったりといった、攻撃対象となる個人に直接的な危害を加える形態をとるものであり、攻撃研究の分野では従来、このような身体的攻撃を中心に研究が行われてきた。ところが、1990年代半ばに、「無視をしたり、仲間はずれにしたりする」といった攻撃行動が、関係性攻撃、という攻撃形態であるとして、Crick & Grotpeter (1995) によって、「自分の目的を達成するために、仲間関係を操作することで相手に危害を加えることを意図した行動」と定義づけられた。関係性攻撃は、攻撃対象となった相手の友人関係を損なわせ、孤立させることを目的としたものだとして捉えられよう。その概念が提唱されて以降、国内外において、児童期から青年期を対象とした研究が数多くなされてきた。例えば、関係性攻撃は、小学生において、抑うつや孤独感、仲間からの拒絶と正の関連を持つことが示されている(Crick & Grotpeter, 1995)。また、小学校5年生から高校3年生までを追った縦断研究では、関係性攻撃が身体的攻撃と同様、安定性を持つ攻撃形態であり、一貫して仲間からの拒絶を予測するという報告がなされている(Cillessen & Borch,

2006)。国内では、抑うつとの関連や(濱口, 2002)、中学生の女子における学校不適応感との関連(櫻井・小浜・新井・2005)が明らかにされてきた。このように、どのような形態をとるのか、という側面からは、身体的攻撃、関係性攻撃という分類がなされて研究が進められてきた。

加えて、攻撃研究では、なぜ攻撃行動をとるのか、という攻撃機能の観点からも、多くの知見が蓄積されている。生起メカニズムに注目した攻撃機能の側面からみると、攻撃行動は、反応的攻撃と能動的攻撃の二つに大別される(Dodge & Coie, 1987)。Dodgeら(1987)は、反応的攻撃が、知覚された脅威によって引き起こされる、怒り情動を伴う衝動的な攻撃行動であるとし、能動的攻撃が、何らかの目的を達成するために、手段としての使用される自発的な攻撃行動だと述べている。反応的攻撃が、やられたらやり返すというような「熱い」攻撃であるのに対して、能動的攻撃は、怒り情動を伴わない「冷たい」攻撃とみなすことができるだろう。先行研究では、例えば、反応的攻撃が衝動制御と負の関連、能動的攻撃がサイコパシー傾向と正の関連を示すことが明らかになっている(Ostrov & Houston, 2008)。また、国内では、中学生と高校生を対象として、反応的・能動的攻撃を測定する尺度が開発されており、反応的攻撃は抑うつ傾向と、能動的攻撃は反社会的行動欲求と、それぞれ正の関連が報告されている(濱口・石川・三重野, 2009; 濱口・藤原, 2016)。こうして、攻撃行動は、その形態や機能が注目されるにつれ、細分化された研究が行われるようになってきた。身体的攻撃、関係性攻撃、反応的攻撃、能動的攻撃が、心理社会的に不適応な指標に対して、それぞれ独自に寄与していることが明らかにされつつある。

攻撃行動が細分化されるにつれて、その認知的側面に着目した、社会的情報処理モデル(Social Information Processing model)を用いた研究も盛んに行われるようになってきた(Crick & Dodge, 1994)。社会的情報処理モデルとは、個人が攻撃行動に至るまでの認知プロセス過程をモデル化したものであり、(1)手がかりの符号化、(2)手がかりの解釈、(3)目標の明確化、(4)反応の検索・構成、(5)反応決定、(6)行動の実行、の6段階によって構成される。このモデルを基盤として、攻撃行動の高い個人にみられる認知の歪みが、どの段階で生じているかを検討する試みがなされてきた。例えば、Crickら(1995)は、第2段階の「手がかりの解釈」で、関係性攻撃と、相手の行動意図を過

度に敵意的に解釈する認知バイアスである、敵意帰属傾向との関連を指摘している。また、反応的攻撃や能動的攻撃の高さは、第 3 段階の「目標の明確化」で、人間関係を損なうような目標の形成のしやすさに繋がる (Murray-Close, Ostrov, Nelson, Casas, & Crick, 2016)。加えて、坂井・山崎 (2004) は、第 5 段階の「反応決定」で、自己の関係性攻撃と、他者の関係性攻撃を容認する反応との関連を示している。攻撃行動の高い個人特有の認知的なプロセスが明らかにされるに従い、各段階に介入して攻撃行動の低下を目指す試みも多々行われ、一定の効果を上げているものも散見される (Colvin et al, 1998; Frey, Hirschstein, & Guzzo, 2000)。

いじめの加害行動を理解するにあたっては、こうした、攻撃研究で得られた知見が非常に有用になるだろう。攻撃行動は、とりわけ、児童期から青年期を対象とした研究では、質問紙で測定されることが多い。国内では、攻撃行動を測る項目内容が、いじめの加害行動を測定するときに使われているものと極めて類似している (e.g., 高橋・佐藤・野口・永作・嶋田, 2009; 伊藤, 2017)。いじめ加害行動の高さは、心理的ストレスや抑うつを始めとする、心理社会的に不適応な指標との関連が報告されており (岡安・高山, 2000; 本間, 2003)、攻撃研究で指摘されている見解と一致しているといえよう。攻撃行動といじめ加害行動を、似通ったものとみなすのであれば、攻撃研究の知見から描き出されるいじめ加害者像は、心理社会的に不適応な状態にあると考えられる。

このように、攻撃行動は、心理社会的な不適応との関連を持つ、介入すべき問題行動とされてきた。しかしながら、細分化された研究が進展していく中で、攻撃行動の高さが、心理社会的に不適応な指標と必ずしも結びつくわけではないという報告がみられるようになった (Prinstein & Cillessen, 2003)。攻撃研究を概観していく上で、こうした知見について触れないわけにはいかないだろう。次節では、攻撃行動と心理社会的適応との関連について検討した研究を概観し、論じていくこととする。

## B. 攻撃行動と心理社会的適応との関連

攻撃研究では、元来、攻撃行動の高さと心理社会的な不適応との関連が頑健に示されてきた (Crick & Grotpeter, 1995; 濱口, 2002)。しかしながら、近年、こうした先行研究と相反するような知見への関心が高まっている。攻撃行動の高さが外的および内的な不適応指標と関連しないことが、関係性攻撃と能動的攻撃

を中心に、多々報告されるようになってきた。例えば、関係性攻撃と共感反応について検討をおこなった勝間・山崎 (2008) は、関係性攻撃と共感反応の認知的側面である役割取得との間に、負の関連がみられなかったことを示している。また、反応的攻撃が抑うつ傾向と正の関連を示す一方で、能動的攻撃と抑うつ傾向は関連しないという結果が報告されている (濱口ら, 2009)。さらに、攻撃行動の高さが、仲間からの拒絶を必ずしも予測しないことが明らかになってきた (Prinstein & Cillessen, 2003)。このように、従来とは異なる知見が、関係性攻撃と能動的攻撃を検討した研究で徐々に蓄積されつつあるのもまた、事実である。では、なぜこのような矛盾が生じるのだろうか。

ひとつに、攻撃行動と社会的地位との関連が挙げられると考える。これまでにも、集団内における社会的地位が、身体的攻撃を予測することは指摘されてきた (Strayer & Strayer, 1978)。しかしながらその関連が、関係性攻撃でより顕著な傾向にあることが、新たに示されている (Prinstein & Cillessen, 2003)。また、Rose & Swenson (2009) は、集団内における自己の社会的地位の高さが、関係性攻撃と抑うつ・不安傾向との間にみられる関連の緩衝要因となることを報告している。集団内で優位な立場にある個人は、その立場から得られる利益を享受していると考えられる。そうした人々に限れば、攻撃行動の高さが心理社会的な不適応に繋がらないという知見は、むしろ順当であるといえるのではないだろうか。

また、進化心理学の観点からも、こうした矛盾を整理できるだろう。攻撃研究ではこれまで、攻撃行動が適正化すべき問題行動であるとして、向社会的行動や社会的スキルの向上を目的とした介入が行うことで、その低減が目指されてきた。ところが、攻撃行動が高い個人の中には、向社会的行動の高さや社会的スキルを持ち合わせたものも一定数存在すると考えられる。こうした場合においても、攻撃行動の高さは、心理社会的な不適応に繋がるのだろうか。

Hawley (2003) は、攻撃行動と向社会的行動を相反する行動としてではなく、資源を得るための二つの戦略であるという、資源コントロール理論を提唱している。資源コントロール理論では、攻撃行動が高くとも、向社会的行動や社会的スキルといった、ポジティブな行動や態度とのバランスがとれていれば、物質的、社会的双方の資源の獲得に繋がることを示唆している。資源コントロール理論では、さらに、威圧的戦略 (攻撃行動) と向社会的戦略 (向社会的行動) によって、

個人を(1)両戦略群, (2)威圧群, (3)向社会群, (4)典型群, (5)無統制群の5つのタイプに弁別できるとしている。そして、威圧的戦略と向社会的戦略の両方を駆使している、両戦略群こそが、物質的・人的な資源を最も効率的に得ており、社会的に優位な立場にあると主張している (Hawley, 2003)。そして、実証的にも、威圧的戦略と向社会的戦略の両方を用いる個人が、集団内で優位性を得やすく、資源を手に入れやすいと指摘した (Hawley & Little, 1999; Hawley, Cardm, & Little, 2007)。

元来、攻撃行動が高い個人は、向社会性が低いとされ、攻撃行動と向社会的行動は、対極にある行動とされてきた。そのため、向社会性や社会的スキルを高めることが、攻撃行動に低減に繋がると考えられてきた。無論、そうした試みには一定の効果がみられており (Frey et al, 2000)、攻撃行動が高い個人に対して、向社会性を高めるような介入をとることは重要であろう。しかしながら、攻撃行動と心理社会的不適応が結びつかないという知見が報告されている現状を鑑みると、攻撃行動の高さを、一概にして捉えるべきではないと考える。例えば、攻撃行動が高く、向社会的行動が低い個人と、攻撃行動と向社会的行動の両方が高い個人では、個々の適応状態だけでなく、集団内における立場も大きく異なるだろう。

これまで、攻撃研究で得られた知見について、整理してきた。その中で描き出されたいじめ加害者像として、ひとつには、先述したような、心理社会的に不適応な状態にあることが想定できる。一方で、集団の中で優位な立場にある姿もまた、いじめ加害者像を如実に現しているといえよう。立場は、集団の中で生じるものである。そのため、後者のようないじめ加害者の姿を浮き彫りにするためには、攻撃研究のみならず、集団構造の観点を考慮した研究を整理する必要があるだろう。次章では、いじめ加害者が、集団内でどのような立場にあるかに焦点を当てるため、学級や仲間集団の構造について検討した研究について取り上げる。

### 3. 集団的側面から捉えたいじめ加害者像

大西 (2015) は、「すべてのいじめは攻撃行動であるが、すべての攻撃行動がいじめであるとは限らない」と述べている。また、仁平 (2017) はいじめを、相手を排斥して孤立させ、弱者にしたあとに攻撃行動を行うプロセスであると指摘している。このように、いじめは、立場の強いものが立場の弱いものに対して、理不尽に行う攻撃行動であると捉えられる。実際

に、森田 (2010) は、国内の研究や行政によって定義されるいじめに共通する部分のひとつに、力関係のアンバランスとその乱用、がみられることを報告している。集団の中で行われ、個々人の立場を加味した攻撃行動こそが、いじめ加害行動であるといえるだろう。

加えて、いじめが生じているとき、その多く場合において加害者は複数であり、仲間集団を形成している (大西, 2015)。そのため、いじめ加害者像を明らかにしていく上で、いじめ加害者を取り巻く仲間集団や友人関係、いわば、いじめ加害者集団に注目することは必須であると考えられる。そして、先述した通り、いじめが力関係のアンバランスによって生じるならば、いじめ加害者集団が、学級の中でどのような立場にあるかを考慮して然るべきだろう。以下では、学級や仲間集団といった集団的側面から、いじめ加害者を論じた研究を概観していくこととする。

#### A. 学級内におけるいじめ加害者の立場に関する考察

集団内で、いじめ加害者はどのような立場にあることが多いのだろうか。加害者と被害者の二者関係に限れば、いじめの定義で述べられているように、加害者は被害者よりも強い立場にあると考えられる。そして、いじめのほとんどが学級内で発生していることを鑑みると (森田, 1994)、学級の集団構造に着目することは極めて重要だろう。

例えば、森口 (2007) はいじめの構造を解き明かす上で、「スクールカースト」を考えることが非常に有用だと示唆している。スクールカーストとは、学級内のヒエラルキーをあらわす概念であり、水野 (2016) は、「何らかの基準に基づく学級内における集団間の階層関係」と定義している。また、貴島・中村・笹山 (2017) は、学級リーダー特性や社交性特性が、個人の学級内地位の決定に寄与することを示しており、スクールカーストは、そうした基準に基づき、立場の異なる集団が学級内で自然と生じることを指した概念といえよう。加えて、鈴木・本田 (2012) は、スクールカーストについて、立場の強い集団にいる生徒たちが、ときとして、立場の弱い集団にいる生徒に対して攻撃的なふるまいをしながら、学級生活を享受していると示唆している。攻撃研究を概観する中で指摘したように、集団内において優位な立場にある場合は、攻撃行動が高くとも、不適応な指標との関連がみられない (Rose & Swenson, 2009)。こうした傾向が学級内でも生じるとするならば、スクールカーストの上位に位置する生徒たちの中で、攻撃行動が高い個人がいるとしても不

可解ではないだろう。

学級内で生じる立場については、社会的勢力に注目した研究からも、示唆に富む知見が得られている。社会的勢力とは、他者に影響を与える自己の潜在能力を指し、French & Raven (1960) によって提唱されたものである。社会的勢力が、集団内のいじめに対する否定的な規範意識に与える影響について検討した鈴木 (2015) は、まじめ、正義感、慎み深さなどで構成される「業績と思いやり」因子を持つ生徒よりも、明るさ、決断力、体力、容姿などで構成される「外見と明朗性」因子を持つ生徒のほうが、集団内の規範に影響を与えやすい反面、いじめに対する否定的な規範との関連はみられなかったことを明らかにしている。すなわち、ここでは、「外見と明朗性」を持つ生徒が、学級内で強い立場にある生徒であり、規範を生成したり、変化させたりする力を有している可能性が高い。

このように、集団内の規範に影響を与えやすい子どもたちや、スクールカーストの上位に位置するような子どもたちは、学級内で中心的な立場にあると捉えることができる。彼らは、明朗性や社交性に富んでいながら、その攻撃性の高さも指摘されている。こうした知見からは、学級内で中心的な立場にある個人や集団が、ときに、いじめ加害者やいじめ加害集団として、学級に君臨しているという示唆を導き出すことができる。とはいえ、学級内で中心的な立場にある子どもたちのほとんどが、いじめの加害に関わっていると判断するのは浅慮であろう。学級内における立場については、ソシオメトリック法や指名法によって行われてきた、仲間関係の“Popularity”研究と通ずる部分があると考えられる。次節では、仲間関係研究の文脈で生じた、“Perceived Popularity”の概念の中で指摘されてきたいじめ加害者像について整理していくこととする。

## B. Perceived Popularity 研究からの示唆

仲間関係の研究で使用されてきた、“Popularity”という用語は元来、優しく、信頼があり、皆から慕われているような、周囲から「受容されている」子どもたちを意味していた (Rubin, Bukowski, & Parker, 1998)。彼らは、「クラスの中で、あなたが最も一緒に遊びたい人は誰ですか」「Who do you like to hang out with the most?」といった、個人の好悪感情が如実に反映される項目で指名される。対して、近年、従来の“Popularity”の概念とは異なる、“Perceived Popularity”，すなわち、『「人気者」と知覚されること』に関心が寄せられるようになってきた (Adler & Adler, 1995)。彼

らは、中心的で目立つ、活発な子どもたちであり、周囲から「受容されている」というよりもむしろ、「人気である」という認知的な評価を得ている。彼らは、「クラスの中で、あなたが最も人気だと思う人は誰ですか」「Who are the most popular kids in your class?」といった項目で、多くの指名を獲得する。

こうして、“Perceived Popularity” (以下：人気者と知覚されること) は、元来の概念“Sociometric Popularity” (以下：好感的な人気を得ること) とは区別をされて検討が行われるようになってきた。例えば、Rodkin, Farmer, Pearl & Acker (2006) は、男児を対象とした研究で、人気を獲得している子どもたちは、模範的な集団とたくましい集団に二分できるとし、前者は攻撃性が低く、後者は攻撃性が高いと報告している。ここでは、前者が好感的な人気を得ている子どもたち、後者が人気者と知覚されている子どもたちを指している。仲間関係の研究における、こうした二種類の人気の概念は、ときに重なり合い、研究によっては正の相関関係も生じる (Lease & Kennedy, 2002)。そして、人気者と知覚されることと、好感的な人気を得ることは、仲間内や集団内における社会的地位が高いという部分で共通しており、前節で述べた、スクールカーストの上位に位置する子どもたちだと考えられよう。

両者は、重なりやすい発達段階はあるものの、大きく異なる概念だと指摘されている (Mayeux, Houser, & Dyches, 2011)。人気者と知覚されること、好感的な人気を得ること、という二つの概念は、発達とともに徐々に弁別されていき、中学校では小学校よりも、相関関係が弱まることが明らかされてきた (Bowker & Rubin, 2010)。それでは、両者における違いは、どこに現れるのだろうか。一つに、攻撃行動が挙げられよう。例えば、10歳から14歳の子どもたちを対象に、人気と攻撃行動との関連、すなわち、人気者と知覚されること、好感的な人気を得ること、および、身体的攻撃、関係性攻撃との関連をそれぞれ検討した研究では、関係性攻撃の高さが人気者と知覚されることの高さを予測し、身体的攻撃の高さが好感的な人気を得ることの低さを予測している (Cillessen & Mayeux, 2004)。人気者と知覚されることは、攻撃行動の中でも関係性攻撃と関連を持ち、好感的な人気を得ることが、概して攻撃行動と関連を持たないといった知見は、多くの研究で報告されている (Rodkin et al, 2006; Prinstein et al, 2003)。

人気者と知覚されることと、好感的な人気を得ることを分かつもう一つの違いとしては、いじめ加害行動

との関連が挙げられるだろう。中学生を対象に、いじめ加害行動との関連を検討した Bruyn, Cillessen & Wissink (2009) によれば、人気者と知覚され、かつ好感的な人気との重なりがみられない子どもたちほど、いじめの加害行動の高いことが明らかにされている。人気者と知覚されることが、いじめ加害行動と正の関連を示す反面、好感的な人気を得ることは、いじめ加害行動と負の関連を示すことを指摘している研究は多く、さらに、こうした研究では、指名法によっていじめの加害行動を直接的に問うもの、例えば、「クラスメイトをいじめている人を3人挙げてください」“the three peer in your classroom who bully other the most”といった項目が用いられている (Goossens & Koot, 2009; Bruyn et al, 2010)。学級内で人気者と知覚されている子どもたちが、いじめ加害者の当事者である可能性を示唆しているものであるといえよう。

仲間関係研究の文脈からは、学級内で中心的な立場にあり、活発な一面をみせるいじめ加害者の姿が描かれている。好感的な人気を得る子どもたちではなく、人気者と知覚されている子どもたちに注目することで、学級内におけるいじめ加害者像がより具体的に浮かび上がったといえよう。次章では、こうした知見を踏まえて得られた、いじめ加害者像について再考する。

#### 4. いじめ加害者像を再考する

はじめに、攻撃研究の知見から浮かび上がったいじめ加害者は、心理社会的に不適応であり、加害行為が可視化されやすく、さらには仲間から拒絶されるような立場にある人物だった。ところが、集団の中の立場、という観点から攻撃行動を捉えて直してみると、攻撃行動の高さは、必ずしも心理社会的な不適応と結びつくわけでないことが明らかになった。そして、学級内に目を向けたとき、いじめ加害者像として、スクールカーストの上位に位置する、「人気者」である姿が浮かび上がってきた。

攻撃研究が盛んに行なわれる中で、いつのまにか、いじめ加害者は、その攻撃行動の高さだけで議論されるようになった。しかしながら、松尾 (2002) が述べているように、いじめをする子どもたちの中には、状況や他者の感情を正しく認知した上で、標的とする子どもに苦痛を与える子どもが少なからず存在する。こうした子どもたちは、攻撃行動の高さだけが問題にされてきた渦中で、見落とされてきた子どもたちであ

るといえよう。実際に、いじめの本来の定義にあるように、加害者が複数であり、集団を構成するという事実に戻れば、加害者たちが有する向社会的な側面は、必ずしも低いわけではないと想定できるだろう。関係性攻撃の適正化プログラムをレビューした永井・山崎 (2015) は、多くのプログラムが、攻撃行動を減らし、向社会的行動や社会的スキル等の獲得や増加を目的としていながら、その適正化には成功していないことを指摘している。こうしたアプローチがなかなか実らない要因のひとつにも、介入対象とされている子どもたちが、すでに向社会性を持ち合わせているという背景があるのかもしれない。

そのため、今後のいじめ加害者研究で、向社会的行動を扱う意義は大きいと考える。攻撃行動と向社会的行動の両面からいじめ加害者を捉えていくことで、攻撃行動を扱うだけでは見えてこなかった、いじめ加害行動の巧みさが見えてくるかもしれない。とりわけ、学級内で優位な立場ある人物のいじめ加害行為は、周囲から黙認されやすく、教師などの第三者の目にも触れにくいだろう。さらに、皮肉なことに、このようないじめ加害者は、心理社会的な不適応を抱えにくく学校生活にも適応しているゆえに、自己の行動を変容しようという動機がなかなか生じないと想定できる。加えて、鈴木 (2015) より、彼らは、規範に対する影響力が高い可能性が示唆される。学級内の規範を左右できるような、権力を持った人物がいじめを主導しているとき、被害者となった子どもに、逃げ場はあるのだろうか。いじめの被害を受けた児童生徒が、計り知れない苦痛を抱くことは、想像に難くないだろう。

そして、こうしたいじめ加害者を理解し、いじめの予防的アプローチに貢献できるような知見を示すためには、向社会的行動への注視だけではなく、彼らの仲間関係の理解に踏み込むべきだと考える。いじめの加害集団そのものに注目した研究では、いじめ加害傾向が高い集団は、いじめに対する否定的な規範意識が低く (大西, 2009)、閉鎖的集団志向が高い (武蔵・河村, 2015) ことが明らかになっている。しかしながら、そうした集団の、友人関係に踏み込んだ研究は極めて少ない。Brown (2011) は、例えば、人気者と知覚されている子どもの周囲には、追従している子どもたち (followers) がいることを指摘しており、彼らが「しばしば人気者と知覚されている子どもの社会的地位にあこがれ、彼らに好かれたり、親密な関係になったりしたがつている」と述べている。人気者と知覚されている子どもを取り巻く仲間集団は、学級内における優位

性の維持, 向上を目指す一面と, 自分より優位性が高い子どものいじめ加害行為を容認, 助長させる一面を持つと考えられる。いじめ加害者集団が抱えている, このような側面を実証的に明らかにしていくことが, いじめの防止策に有効な知見に結びつくのではないだろうか。

## 5. 結語

本稿では, 攻撃研究で描かれてきたいじめ加害者像と, 学級内における社会的地位の研究で指摘されてきたいじめ加害者像についてそれぞれ考察, 議論し, いじめ加害者を攻撃行動と向社会的行動の両面から捉えることの重要性について述べた。そして, 今後のいじめの加害者研究が発展する中で, いじめ加害者が持つ向社会的性に目を向け, 彼らが築く仲間集団に対する理解が, いじめの予防的アプローチに結びつく可能性を提示した。本稿が, いじめの予防に, 効果的な知見の提供を目指す研究の一助となれば幸いである。いじめに苦しみ, 命を絶ってしまう児童・生徒が少しでも減ることを願い, 結びとする。

## 引用文献

- Adler, P.A. & Adler, P. 1995, "Dynamics of inclusion and exclusion in preadolescent cliques", *Social psychology quarterly* 145-162.
- ベネッセ教育総合研究所, 2010, 『第2回子ども生活実態基本調査報告書』.
- Bowker, J.C., Rubin, K.H., Buskirk-Cohen, A., Rose-Krasnor, L. & Booth-LaForce, C. 2010, "Behavioral changes predicting temporal changes in perceived popular status", *Journal of Applied Developmental Psychology* 31: 126-133.
- de Bruyn, E.H., Cillessen, A.H. & Wissink, I.B. 2010, "Associations of peer acceptance and perceived popularity with bullying and victimization in early adolescence", *The Journal of Early Adolescence* 30: 543-566.
- Cillessen, A.H. & Borch, C. 2006, "Developmental trajectories of adolescent popularity: A growth curve modelling analysis", *Journal of adolescence* 29: 935-959.
- Cillessen, A.H. & Mayeux, L. 2004, "From censure to reinforcement: Developmental changes in the association between aggression and social status", *Child development* 75: 147-163.
- Cillessen, A.H., Schwartz, D. & Mayeux, L. 2011, *Popularity in the peer system*, Guilford Press.
- Coie, J.D. & Kupersmidt, J.B. 1983, "A behavioral analysis of emerging social status in boys' groups", *Child development* :1400-1416.
- Colvin, G., Tobin, T., Beard, K., Hagan, S., & Sprague, J. 1998. The school bully: Assessing the problem, developing interventions, and future research directions. *Journal of behavioral education* 8: 293-319.
- Crick, N.R. & Dodge, K.A. 1994, "A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment", *Psychological bulletin* 115.
- Crick, N.R. & Grotpeter, J.K. 1995, "Relational aggression, gender, and social - psychological adjustment", *Child development* 66: 710-722.
- Dodge, K.A. & Coie, J.D. 1987, "Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups.", *Journal of personality and social psychology* 53.
- French Jr, J. R., Israel, J., & As, D. 1960, "An experiment on participation in a Norwian factory: Interpersonal dimensions of decision-making", *Human Relations* 13: 3-19.
- Frey, K.S., Hirschstein, M.K. & Guzzo, B.A. 2000, "Second Step preventing aggression by promoting social competence", *Journal of Emotional and Behavioral Disorders* 8: 102-112.
- 濱口佳和, 2002, 『攻撃性と情報処理 攻撃性の行動科学発達・教育編』ナカニシヤ出版.
- 濱口佳和・藤原健志, 2016, 「高校生の能動的・反応的攻撃性に関する研究」『教育心理学研究』64(1): 59-75.
- 濱口佳和・石川満佐育・三重野祥子, 2009, 「中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連」『教育心理学研究』57(4): 393-406.
- Hawley, P.H. 2003, "Prosocial and coercive configurations of resource control in early adolescence: A case for the well-adapted Machiavellian", *Merrill-Palmer Quarterly* 49: 279-309.
- Hawley, P.H. & Little, T.D. 1999, "On winning some and losing some: A social relations approach to social dominance in toddlers", *Merrill-Palmer Quarterly* :185-214.
- Hawley, P.H., Little, T.D. & Card, N.A. 2007, "The allure of a mean friend: Relationship quality and processes of aggressive adolescents with prosocial skills", *International Journal of Behavioral Development* 31: 170-180.
- 橋本摂子, 1999, 「いじめ集団の類型化とその変容過程」『教育社会学研究』64: 123-142.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1994, "Attachment as an organizational framework for research on close relationships." *Psychological inquiry* 5: 1-22.
- 本間友巳, 2003, 「中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応」『教育心理学研究』51(4): 390-400.
- 伊藤美奈子, 2017, 「いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究」『教育心理学研究』65(1): 26-36.
- 勝間理沙・山崎勝之, 2008, 「児童における3タイプの攻撃性が共感に及ぼす影響」『心理学研究』79(4): 325-332.
- 川北稔, 2008, 「いじめはなぜいけないのかを共有するために一関係性攻撃の概念を手がかりに一」『本間友巳(編著), いじめ臨床: 歪んだ関係にどう立ち向かうか』.
- 貴島侑哉・中村俊哉・笹山都生, 2017, 「スクールカースト特性尺度の作成と学級内地位との関連の検討」『福岡教育大学紀要 第四分冊, 教職科編』66: 27-37.
- 久保順也, 2013, 「児童生徒間のいじめに関する心理学的研究の展望」『宮城教育大学紀要』48: 229-241.
- Lease, A. M., Kennedy, C. A., & Axelrod, J. L. 2002, "Children's social constructions of popularity", *Social Development* 11: 87-109.



- Leff, S.S., Gullan, R.L., Paskewich, B.S., Abdul-Kabir, S., Jawad, A.F., Grossman, M., Munro, M.A. & Power, T.J. 2009, "An initial evaluation of a culturally adapted social problem-solving and relational aggression prevention program for urban African-American relationally aggressive girls", *Journal of Prevention & Intervention in the Community* 37: 260-274.
- 松尾直博, 2002, 「学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向」『教育心理学研究』50(4): 487-499.
- Mayeux, L., Houser, J.J. & Dyches, K.D. 2011, "Social acceptance and popularity: Two distinct forms of peer status".
- 水野君平, 2016, 「学校適応感とその予測要因に関する検討(1): 「学校適応の負の側面」としてのスクールカースト」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』126: 101-110.
- 文部科学省, 2013, 『いじめ防止対策推進法』
- 文部科学省, 2017, 『平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(速報値) について』
- 森口朗, 2007, 『いじめの構造』新潮社.
- 森田洋司, 2010, 『いじめとは何か』中公新書.
- 森田洋司・清永賢二, 1986, 『いじめ: 教室の病い』金子書房.
- Morton, J.H., Additon, H., Addison, R., Hunt, L. & Sullivan, J. 1953, "A clinical study of premenstrual tension", *American Journal of Obstetrics & Gynecology* 65:1182-1191.
- 村山恭朗・伊藤大幸・浜田恵・中島俊思・野田航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井正次, 2015, 「いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性」『発達心理学研究』26(1): 13-22.
- Murray-Close, D., Nelson, D.A., Ostrov, J.M., Casas, J.F. & Crick, N.R. 2016, "Relational aggression: A developmental psychopathology perspective", *Developmental psychopathology*.
- 武蔵由佳・河村茂雄, 2015, 「小・中学生のグループ状態認知尺度の作成—グループに所属する理由および被侵害との関連の検討—」『カウンセリング研究』48(3): 133-146.
- 永井明子・山崎勝之, 2015, 「児童の関係性攻撃適正化を目指す教育的介入の開発に向けて」『プール学院大学研究紀要』56: 305-320.
- 仁平義明, 2017, 「エビデンスに基づく「いじめ対応」最前線」『白鷗大学教育学部論集=Hakuoh Journal of the Faculty of Education』11(1): 45-71.
- 岡安孝弘・高山巖, 2000, 「中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス」『教育心理学研究』48(4): 410-421.
- 大西彩子, 2015, 『いじめ加害者の心理学』ナカニシヤ出版.
- 大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和, 2009, 「児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響—学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して—」『教育心理学研究』57(3): 324-335.
- 岡安孝弘・高山巖, 2000, 「中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス」『教育心理学研究』48(4): 410-421.
- Ostrov, J.M. & Houston, R.J. 2008, "The utility of forms and functions of aggression in emerging adulthood: Association with personality disorder symptomatology", *Journal of Youth and Adolescence* 37: 1147-1158.
- Prinstein, M.J. & Cillessen, A.H. 2003, "Forms and functions of adolescent peer aggression associated with high levels of peer status", *Merrill-Palmer Quarterly* 49: 310-342.
- Rodkin, P.C., Farmer, T.W., Pearl, R. & Acker, R.V. 2006, "They're cool: Social status and peer group supports for aggressive boys and girls", *Social Development* 15: 175-204.
- Rose, A.J. & Swenson, L.P. 2009, "Do perceived popular adolescents who aggress against others experience emotional adjustment problems themselves?", *Developmental psychology* 45.
- Rubin, K.H., Bukowski, W.M., Parker, J.G. & Bowker, J.C. 2008, "Peer interactions, relationships, and groups", *Child and adolescent development: An advanced course* :141-180.
- 坂井明子・山崎勝之, 2004, 「小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予期に及ぼす影響」『教育心理学研究』52(3): 298-309.
- 櫻井良子・小浜駿・新井邦二郎, 2005, 「中学生における関係性攻撃傾向の検討—同調行動および学校適応感の関連」『筑波大学発達臨床心理学研究』17: 39-44.
- 下田芳幸, 2018, 「中学生のいじめ認識傾向と攻撃行動との関連性」『佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要』2: 21-28.
- Sullivan, H. S. 1953. *The collected works* (Vol. 1). Norton.
- Salmivalli, C. 2010, "Bullying and the peer group: A review", *Aggression and violent behavior* 15: 112-120.
- Strayer, J. & Strayer, F. 1978, "Social aggression and power relations among preschool children", *Aggressive Behavior* 4: 173-182.
- 鈴木翔, 2015, 「なぜいじめは止められないのか?」『教育社会学研究』96: 325-345.
- 鈴木翔・本田由紀, 2012, 『教室内(スクール)カースト』光文社.
- 高橋史・佐藤寛・野口美幸・永作稔・嶋田洋徳, 2009, 「中学生用攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討(原著)」『行動療法研究』35(1): 53-66.
- 滝充, 1992, 「いじめ」行為の発生要因に関する実証的研究」『教育社会学研究』50: 366-388.
- 戸田有一, 2010, 「児童・青年の発達に関する研究動向といじめ研究の展望」『教育心理学年報』49: 55-66.
- Vaillancourt, T., Hymel, S. & McDougall, P. 2003, "Bullying is power: Implications for school-based intervention strategies", *Journal of Applied School Psychology* 19: 157-176.

(指導教員 遠藤 利彦)